

クレアの 'The Mole Catcher' の意味

鈴木 蓮 一

Understanding Meanings of Clare's 'The Mole Catcher'

Renichi SUZUKI

(Received October 1, 2003)

(1)

クレアは1822年2月21日付けのTaylor宛ての書簡で、ワーズワスの詩を模倣したパロディーは「彼（ワーズワス）の素朴さを気取ったところをからかって書かれた」(twas written in ridicule of his affectations of simplicity)¹⁾のだと言っている。また1824年10月29日の'The Journal'では、ワーズワスの詩について、「私が経験した中で最も魅力的な詩が少しあるが、それらは彼の神秘的なものに満ちている」(there is some of the sweetest poetry I ever met with tho full of his mysterys)²⁾と、さらに同年11月7日には「ワーズワスの詩にざっと目を通し、ソロモンの雅歌を読んだ。彼の詩のイメージには美しいものがあるけれど、私見では、それらのうちのいくつかは不合理なもの以上のものとは調和させられない」(Lookd into Wordsworths Poems & read Solomons Song & beautiful as some of the images of that Poem are some of them are not reconcilable in my judgment above the ridiculous)³⁾と記述している。クレアのワーズワス観についてSara Lodgeは次のような見解を述べている。すなわち「クレアの1824年から1825年にかけての日誌は、ワーズワスの詩が好きになれそうにないと予想し、かつ彼の詩の<不合理なイメージ>についてユーモアに富んだ懐疑を保持しているにもかかわらず、クレアがワーズワスの詩を読み、賞賛したことを示している。そして彼（クレア）自身のヒル取り人またはモグラ捕り人はワーズワスの詩に対する反応の要素を含んでいるであろう」⁴⁾と。クレアが'Resolution and Independence'をどの程度深く、しかも明確に意識して'The Mole Catcher'という詩を書いたかは計り難いけれども、彼がワーズワスの詩において感じ取った「素朴さを気取ったところ」、「神秘的なもの」、「不合理なもの」についての考えを書簡、日誌、その他の散文に多少とも書き留めていることから判断すると、ともかくこの詩がワーズワスのヒル取り老人の詩を意識して、それに対する「反応」を示したものであることには疑問の余地はない。また「'The Mole Catcher'は、これまで批評上の注目を受けたことのないクレアの多くの詩作品の一つである」⁵⁾とSaraは述べている。確かにこの詩を扱った批評論文は彼女自身のもの以外には見当たらないようである。だが、クレアが描くモグラやモグラ塚のイメージは、モグラ捕り老人のイメージと同様、意義深い政治的かつ審美的含意をもっていると考えられる。これらのイメージは他のいくつかの詩にも描かれているモグラのイメージと密接な関連がある。Saraは、'The Mole Catcher'が内容的に'The Widow or Cress Gatherer'(1820年)や後期の詩、特に'Remembrances'(1832年)と強い結びつきをもっていると指摘している。⁶⁾したがって筆者は、Saraが提示したこのような視点を踏襲し、これらの詩に加えて田舎の貧しい労働者の生活を描出している'The Woodman'(1819年)と'The Cottager'(1830年)を併せ読むことによって、またワーズワスの詩と比較することによって'The Mole Catcher'(1822-25年)という詩のもつ独自性と意味を考えてみたい。

(2)

'The Mole Catcher'の構成は大雑把に言って、①労働者としてのモグラ捕りの老人②救貧院の実情③モグラ及びモグラ塚の象徴性という三つの要素から成り立っている。「クレアの成熟を特徴づける詩行へのますます巧妙かつ流麗な接近」⁷⁾を示すスペンサー連で書かれたこの詩の理解を深めるために、これらの構成要素を吟味して

いきたい。当時既に廃れつつあったモグラ捕りという職業の実態を克明に記録することによって、詩人は急激な社会変化の中で失われつつあった田舎の「伝統的生活」へのノスタルジアを表わしている。だがこのノスタルジアにはこの喪失が喚起する不満、悲しみ、怒りが内在している。この詩に描出されたイメージの意味を読み取りながら、作者の思想と感情を探りたい。まず、1, 2 連における労働者としてのモグラ捕り老人の描写はこうである。

Soon as the elderns pethey branches buds
 That hides in glooming shade the workhouse door
 An ancient man is seen about the woods
 & on the plashy paths along the moor
 Pottering wi mellancholy paces oer 5
 His propping stick he gogs when days are dry
 Glad to escape his neighbours troubles sore
 In that sad house—for peace beneath the sky
 From pain that in deaths arms on straw beds groaning lye

& sighs of girls heart broken oer despair 10
 That feed false vows wi memorys ceasless tears
 & crys of childern born to wither there
 Like buds which tempests in the april seres
 Wi piteous plaining stirring helpless ears
 To shun all these when southern skys grow warm 15
 Ere scarce a daisey on the green appears
 He potters round each green grain sprouting farm
 To catch the moles wi traps that does the fences harm⁸⁾

春になり、ニワトコの枝が芽吹き、救貧院の入り口のドアを覆い隠すように葉が繁りはじめると、森の周辺や荒地のじめじめした道を憂鬱な一人の老人が、ゆるやかな足取りで歩いている。彼は杖をついて救貧院から出かけているところである。彼は救貧院では同じような境遇の仲間たちと苦悩を共にしていたが、彼らから逃れて嬉しい気分である。藁敷きのベッドの上で死の苦しみにうめく人々や、男の不実ゆえに絶望した若い女の嘆きから、また栄養失調のため衰弱し、救貧院で死んでいく嬰兒の泣き声から逃れて、彼は自然の世界の静穏を求め、放浪する。彼らの苦悩と悲しみの声を聞いても仲間たちは何もしてやれない状態である。救貧院はまさに「悲しい収容所」(sad house) である。老人はこういう悲惨な状況から逃れ、穀物が育ちはじめ緑の葉を伸ばしている農場を一軒一軒訪ね、罌を仕掛け、生垣に損害を与えるモグラを捕まえて、その報酬を受け取る。だが彼の仕事はモグラ捕りだけではない。生活の糧を得るために、ニワトコの木の塊を靴職人が使う木釘に加工したり、タゲリの巣から卵をとったり、洪水で出来た穴の中をギザギザの切り込みのある又のついた棒で掻き回してウナギを捕ったり、森で食用キノコを、また小川で熊手を使ってクレソンを採ったり、荒地にある小池でヒルを取るといった彼の仕事がリアルに描写されている。このように七種類もの仕事をせざるを得ないというのがこの老人の生活の現実なのである。自然界の中でこういう仕事をする彼は、多くの経験によって、自然の仕組みとその現象についての知識を身につけている。3 連では、労働している村人たちが天候についての彼の正確な知識に信頼を寄せている様子が述べられる。

Een he from fames proud lottery owns a prize
 A sort of walking almanack he seems 20
 The rustic swains who deem him weather wise
 Shepherd & woodman his discourse esteems
 & ploughmen often stop their reeking teams
 On cloudy morns his knowledge to obtain

To know if it betokens what it seems 25
 & chattering women weeding in the grain
 Will stop to shout & know if he has thoughts of rain

彼のような老人でさえも、「名声」という傲慢な富くじの当たりくじを引く資格がある、または権利として要求できるというのである。すなわち彼は「歩く暦」として有名であった。教養のない農夫、羊飼、きこり、雑草を刈る女たちが、天候に関するこの老人の知識を高く評価し、天候の予想について彼に尋ねている。彼が「歩く暦」のように考えられたことは、彼の生活が自然といかに深く関わり、自然をいかに熟知していたかを示している。彼の多様な仕事についての描写の一部は7連においてはこうである。

Spring yearly meets him with his shouldered rake 55
 To drag the crowding cresses from the brook
 & soon as springs first mornings are awake
 He threads the pasture pewets eggs to look
 & when these fail the more ponds flaggy nook
 To beat for leeches—then the mushrooms start 60
 In black green fairey rings—thus natures book
 Is turned till he each lesson knows by heart
 In lifes rude patchwork play to act the allotted part

この老人は生計を立てるためにこれらの仕事をしている。これらの仕事をする過程において彼は「自然という書物」を読み、「人生というでたらめに寄せ集められた、つぎはぎだらけの芝居において、割り当てられた役を如何に演じるかということについて一つ一つ教訓を学びとる」のである。この表現から推し量ると、貧民にとって人生は偶然性に満ちており、巡り合せの悪さが不幸を招くのだと語り手は考えているようだ。'The Widow or Cress Gatherer' では「欺瞞というものが作り上げるすべての仮面の中で、人生よ、おまえの仮面が最も欺く顔である」(Of all the masks despection ever weaves / Life thines the visage that the most deceives, 27-28)⁹⁾ と言っている。人生の不運がもたらす貧困生活を強いられるこの老人は、救貧院を脱出し、独立した生活をするためにこのような七つものつらい仕事をしているのである。クレアが描く老人においては、老いと貧困に苦しみながら厳しい労働条件のもとで自然の中で働き、経済社会の現実世界の中で生きているイメージが強調されている。'Resolution and Independence' において、「小さな池か荒地の水溜りのそばで／雲のように動かずにその老人は立っていた」('Beside the little pond or moorish flood / Motionless as a Cloud the Old Man stood, 81-82)¹⁰⁾ というように、ワーズワスが描く「人間」は「雲」という無生物に喩えられている。初め大きな岩という無生物が「心」(sense) をもった物に、さらにアザラシという生き物であるように語り手には思われている。そしてちょうどその逆のことが、語り手の「心の眼」の働きによって起っている。すなわち老人が雲という無生物に変容しているのである。さらに、

His words came feebly, from a feeble chest,
 Yet each in *solemn* order followed each,
 With something of a *lofty* utterance drest;
 Choice word, and measured phrase; above the reach
 Of ordinary men; a *stately* speech!
 (my emphasis, 99-103)

において見られるように、人間は、語り手と同一視される詩人の意識、すなわち 'mind's eye' によって定義され、'solemn'・'lofty'・'stately' という形容詞でもってイメージ化されている。この詩において、「私は心の眼で彼を見ていたようであった」(In my mind's eye I seemed to see him..., 136) ということがヒル取り老人のイメージを規定している。老齢のため弱った体であるのに、「堂々たる話し振り」であり、最終的に詩人は「その老衰した人間の内に堅固な精神を見出して」(to find / In that decrepit Man so firm a mind, 144-5) いる。結局、ワーズワスにとって、この老人は「夢の中で出会ったことのある人か、もしくはある遠い世界から遣わされた人のようで」

(Like one whom I had met with in a dream; / Or like a Man from some far region sent, 117-8) あった。クレアのリアリズムは、ワーズワスのこのようなイメージ化とは対照的である。クレアの場合、同じ貧困生活を送るモグラ捕り老人は、ワーズワスの場合のような超越的なイメージの存在として表現されてはいない。モグラ捕り老人は8連で次のように描写される。

He leans on natures offerings for supply
Like a *weak* child upon a mothers breast
He *feebly* marks her *unconcerning* eye
& takes her givings with no vain request
To urge them better he with aught is blest
For the to morrow he neer feels a fear
His hopes upon to day have all their rest
When labours fail the workhouse fare is near
& thus *on miserys edge* he *potters* round the year (my emphasis)

注意すべき表現は ‘weak’・‘feebly’・‘unconcerning’・‘on miserys edge’・‘potters’である。この老人は、母親の胸に抱かれる「脆弱な」幼児のように「自然」の恵みに頼っている。しかしながら、「自然」は人間を優しく育んでくれる慈愛に溢れてはいなく、人間には冷淡な存在なのである。老人は、人間に対しては無関心な「自然」の眼差しに「弱々しく」注目し、「自然」の恵みがより良い物であってほしいという無益な要求はしないで、「自然」が与えてくれる物を受け取り、それが何であっても幸福に感じている。明日への不安はなく、彼の望みは今日という日のためだけのものである。労働が何の収入ももたらさない時は、救貧院が施す食べ物が入る。このように、この老人は老齢と貧困のため「悲惨の淵に沈みながら」、一年中弱々しく、漫然として、ゆっくりと仕事をしながら、ぶらぶら歩きまわっている。この詩の中で5回使用されている‘potter’という語は興味深い。それはたんに‘to go about or walk slowly, idly, or aimlessly’ (OED. 5b) にとどまらず、同時に to occupy oneself in an ineffectual or trifling way; to work or act in a feeble or desultory manner’ (OED. 4a) や ‘to move or go about poking or prying into things in an unsystematic way, or doing slight and desultory work’ (OED. 5a) の意味を表している。またノーサンプトンシャーの方言における ‘to go about anything in a slow, awkward manner; working, but making little progress’¹¹⁾ の意味も含んでいる。このように、モグラ捕り老人のイメージは、与えられた生活条件のもとでその日暮らしをしている現実的な人間, Saraの言葉を借りれば「事実どおりの能力」(a literal capacity)¹²⁾ をもった人間のイメージである。そしてワーズワスの老人が「決意」とか「独立」といった美質の道徳的模範となっているのに反し、クレアの老人は何ら「明白な教訓的機能」(overt didactic function)¹³⁾ を果たしていないのが特徴である。

しかしながら、この老人についての、「自然が与えてくれるどんな物にも彼は満足している」(he with aught is blest) という詩句における ‘blest’ という語は、9連の ‘satisfied’ という語へと繋がっていく。これらの語には語り手の理想が込められているようだ。

... by a cool banks side
He eats his bread the all his toil can earn
& thanks his God that he is so supplied
& to his toil again he *potters satisfied* (my emphasis)

自分がつらい労働によって稼いだすべてであるパンを食べるとき、このように恵まれたことを神に感謝し、ふたたび満ち足りた気持ちであちこち仕事をしながら歩きまわる。この ‘satisfied’ という語は重要である。それは当時の資本家や新興ブルジョワジーが私利私欲に駆られ、拝金主義に狂奔していたからである。この語は貧しい庶民を、クレアの代表的な詩におけるキーワードである「勤勉」(industry)・「利己心」(self interest)・「貪欲」(greed) によって特徴づけられている人々とは対蹠的存在にしている。またこの語と類似した働きをもった語としては、‘The Cottager’ (1830年) という詩の最後の部分に出てくる ‘content’ がある。

Content is helpmate to the days employ
 & care neer comes to steal a single joy
 Time scarcely noticed turns his hair to grey
 Yet leaves him (the cottager) *happy* as a child at play (my emphasis, 101-104)¹⁴⁾

この農業労働者は日々仕事をするとき、「満足」を大事にしている。不安や心配を抱くことはないので、彼の「喜び」は失われることはない。「時間」が経つにつれ、知らず知らずのうちに白髪まじりとなるが、彼は遊んでいる子どものように幸福であると言う。'child' や 'joy' と同様、クレアの詩においてキーワードといえる 'happy' や 'blest' については、やはりスペンサー連で書かれた 'The Woodman' (1819年) という詩の3連に次のような箇所がある。

His breakfast water porridge humble food
 A barley crust he (the woodman) in his wallet flings
 Wi this he toils & labours i' the wood
 & chops his faggot twists his band & sings
 As *happily* as princes & as kings
 Wi all their luxury—& *blest* is he
 Can but the little which his labour brings
 Make both ends meet & from long debts keep free
 & keep as neat & clean his creasing* family (my emphasis)¹⁵⁾ * increasing

朝食は質素な朝粥である。きこりはずだ袋に堅くなったパンを一切れ放り入れ、これをもって森に出かけ仕事をする。贅沢な食べ物すべてをもった王子や王様と同じくらい幸福な気持ちで歌をうたいながら、木を切り、薪を束ねている。「つらい仕事が稼ぐわずかな収入が家計に赤字を作らず、／増える家族を小奇麗に生活させることさえできるならば／彼は幸福である」。この連でも下層労働者においては、やはり無欲と満足感が幸福の基本になっている。しかしながら、田舎に住む庶民の最大の幸福は、家族の絆の強さやわが子への愛情の深さによってもたらされるものであることが 'The Cottager' の一節によく表われている。

Around the corner upon worsted strung
 Pootys in wreaths above the cupboards hung
 Memory at trifling incidents awakes
 & there he keeps them for his childerns sakes
 Who when as boys searched every sedgey lane
 Traced every wood & shattered cloaths again
 Roaming about on raptures easy wing
 To hunt those very pooty shells in spring
 & thus he lives too happy to be poor
 While strife neer pauses at so mean a door (87-96)

家の一隅にカタツムリの殻が毛糸で花輪の形に数珠つなぎにされ、食器棚の上に吊り下げられている。農業労働者の記憶は些細な出来事に触れても、よみがえってくるものである。彼はわが子たちのためにカタツムリの殻を捨てないで飾っている。そしてわが子たちが、まだ幼かった頃春になると、歓喜に満ちてスゲの茂った小道や森の中をくまなくカタツムリを探しまわったことを思い出している。経済的「競争」が彼の農夫小屋のような粗末な家に影響を及ぼさないかぎりには、彼は「貧しい」とは思われぬほど大変幸せに暮らしているという。ここでも詩人は、経済的繁栄を追求する「競争」が人間の心から「喜び」を失わせ、幸福を奪うものであると言わんとしているようである。

次にモグラ捕り老人が他の庶民と交際するイメージを見たい。6連と15連では彼が嗅ぎタバコを働く村人たちに与える様子が描かれている。

The shepherd waiting oer his hook will stand
 & milkmaid rest her bucket by a stile
 The hedger too will pull from off his hand
 His mitten—waiting his approach the while
 To beg a pinch of snuff amid his toil
 The old man mends his pace to see them stay
 & opes his box if full with many a smile
 While from the grass the woodman does display
 His cag & bids him drink to help him on his way (6 連)

& while his snuffbox offers its supply
 Complaint can never be oer his heart prevail
 Pulled out & pinched by every passer bye
 It always doth his weary walks regale
 & adds a tiresome length to every tale
 But in its need he mopes oer field & town
 His strength sinks in him & his spirits fail
 In silent pace he potters up & down
 & scarcely says good morn to passing maid or clown (15 連)

羊飼いが柄の曲がった杖にもたれて立っている。乳搾りの娘が踏越し段のそばにバケツを置く。生垣職人も手袋をはずす。彼らは、仕事をしている老人から嗅ぎタバコを少し貰いたくて、彼がやって来るのを待っている。老人は彼らを見ると彼らの方に行き、タバコが箱に一杯入っている時は何度も笑いながら嗅ぎタバコの箱を開けて与える。その間、きこりは草むらの中から飲み物が入った樽を取り出し、老人に元気が出るようにと勧めている。この箱の中身がたくさん残っている間は彼の心が不満で占められることはない。通りすがりの誰もがタバコをつまみ、老人は長々と退屈な話を続ける。しかし中身がない時は、彼は畑や村中を憂鬱そうにとほとほと歩いている。この嗅ぎタバコを媒介にした交流の場面は、他人に物を与えることの喜びや満足感、他人に与える物がない時の悲しさや落胆を老人の心理を通して描くことによって、利他精神が存在していたと理想化される田舎のコミュニティへの語り手のノスタルジアを表わしたものであると解釈される。

(3)

モグラ捕り老人の描写における最大の特徴は理想主義を内包するリアリズムであるといえる。だが11連と12連におけるモグラを捕る場面の描写に至り、このリアリズムはシンボリックな要素を帯びてくる。

With spud & traps & horsehair strings supplied
 & potter out to seek each fresh made hill
 Pricking the greensward where they (moles) love to hide
 He sets his treacherous snares resolved to kill
 & on the willow sticks bent to the grass
 That such as touched jerks up in bouncing springs
 Soon as the little hermit tries to pass
 His little carcass on the gibbet hings (11 連)

90

& as a triumph to his matchless skill
 On some grey willow where a road runs bye
 That passers may behold his powers to kill

100

On the boughs twigs he'll many a felon tye
 On every common dozens may be met
 Dangling on bent twigs bleaching to the sun
 Whose melancholly fates meets no regret
 Though dreamless of the snare they could not shun
 They died unconscious of all injury done (12 連)

雪解けの春になり、草が緑の若葉を伸ばし、「銀灰色の毛皮をもったモグラたちが自由に穴を掘る」(silk haired moles get liberty to root, 85) 頃になると、強い雨風から身を守るため、つぎはぎだらけの外套に包まれたモグラ捕り老人が、ひとり寂寥とした畑でこつこつと仕事をしながら、重い足取りで歩いている。'An ancient man goes plodding round the fields, 86' における 'plod' という動詞は 'to walk heavily or without elasticity' と 'to work with steady laborious perseverance' の両義 (OED. 1. 2) を表わしており、この老人の緩慢な動作と忍耐強さを強調している。彼は、鋤、罌、馬の毛を撚った紐を持って、新しく土をほうりあげて作られたモグラ塚をひとつひとつ探してまわる。モグラの大好きな隠れ家である芝生に鋤を突き刺し、モグラを殺す決心して「巧みに欺く罌」を仕掛けていく。接触すると強力なはずみでグイと跳ね上がるように曲げられ、草に結わえられた柳の小枝の上を「小さな隠遁者」であるモグラが通るやいなや、その小さな死体が絞首台から吊り下がるという罌なのである。老人は、誰にも劣らない自分の技術を称えるものとして「多くの犯罪者たち」を道路端の柳の枝に吊るす。そうするのは、通行人たちにモグラを殺す自分の能力を知ってもらうためである。82 行から 101 行までは、モグラを捕る時の状態がリアルに詳しく描かれている。モグラ捕り老人とワーズワスのヒル取り老人のイメージを比較すると、確かに①孤独な移動②隠遁者的存在③風景と切り離せないこと④救貧院への言及という両者の共通点が見られる。しかしながら、ヒル取り老人は①語り手にとって超越的な意味をもっている②人間的要素が失われている③比喩的な意味における予言者である。④彼の生活の困窮が語り手にとって「模範的であり、かつ精神を高める」(exemplary and elevating) ものである。¹⁶⁾ ワーズワスの目論見が、「感情に基づくコミュニティを信じ、喪失と貧窮の物語をヴィジョンへの純化作用をする導入部にするため、それらの物語を抒情詩として書く個人的な声を正当化することである」(the legitimation of a personal voice that believes in a community based on the feelings and that lyricizes narratives of loss and destitution so as to make them sublimatory preludes to vision)¹⁷⁾ と考えられるのに反し、クレアは「情景や人物を主に理想化されたヴィジョンの道具、あるいは作家と読者の間における審美的共感の道具に変えること」(to render scenes and figures predominantly as *instruments* of a sublimated vision or aesthetic sympathy between writer and reader)¹⁸⁾ に疑問を感じていた。ヒル取り老人の詩に対するクレアの反応の一つは、「語り手」の「心の眼」によって外在する「物質的事物」が「定義する意識の中心へと引き入れられる」ことの不合理的を感じ取った結果のリアリズムである。それゆえクレアは外在する事物を、キーツやワーズワスのように、「自分自身の神秘的なところ、または感情の探求のための踏み台」(a springboard for exploration of his own 'mysterys' or emotions)¹⁹⁾ として利用することはない。このリアリズムの他の例を 'The Widow or Cress Gatherer' にとってみる。

Encroaching want showed not such frightful form
 Or drove her dithering in the numbing storm
 Picking half naked round the brooks for bread
 To earn her penny ere she can be fed
 In grief pursuing every chance to live
 That timely toils in seasons please to give
 Thro hot & cold some weather as it will
 Striving with pain & disappointed still
 Just keeping from expiring life's last fire
 That pining lingers ready to expire
 The winter thro' near barefoot left to pull
 From bramble twigs her little mites of wool
 A hard earned sixpence when her mops are spun

By many a whalk & aching finger won
 & eeking* hirpling** round from time to time
 Her harmless sprotes from hedges hung wi rhyme
 The daily needings wants worst shifts requires
 To hunt her fuel ere she makes her fires (97-114)²⁰ * seeking ** walking lame, limping

教区教会の事務員であり、学校の先生であった夫が生きている時は、彼女は楽しみごとをもてたし、彼女の「勤勉さ」ゆえにしばしば暇な時間を見つけて編物をしたり、紡いだりしていたが、自分の生活を維持するための辛い仕事をしなくてよかった。善良な隣人たちに恵まれ、その日その日の食べ物に困ることはなく、身だしなみもよかった。しかし夫の死後彼女は、忍び寄る困窮のために、凍える寒さの中で震えながら小川でクレソンを採ることまではしなくて済んだものの、悲しみのうちに、苦痛と闘って季節季節の仕事をしなければならなかった。その仕事はいつも損失のほうが多く、ただ最後の命の炎が燃え尽きるのをくいとめているにすぎなかった。冬の間中、ほとんど裸足でクロイチゴの小枝から小さな羊毛の房を引っぱり取る。何度も歩いて探しまわり、指をトゲに刺されて痛み、非常に苦勞して取った羊毛を紡いでモップを作り上げ、6ペンスを稼ぐのである。時々びっこをひきながら、霜に覆われた生垣のところで、取っても罪にはならない薪用の小枝を探し回っている。日々の必需品は困窮者に、暖炉のための燃料採集というようなひどく極端な苦勞を要求する。この一節でのリアリズムの狙いはクレソンを採る未亡人の生活の〈現実〉を表現することであるように思われる。彼女は生活のためにクレソンを採るだけでなく、季節ごとに見つけられるどんな仕事もしている。それらの仕事に伴って彼女が体験する悲しみ、失望、身体の老衰と苦痛、苦勞の実態を描くことがクレアのリアリズムの目的ではないであろうか。同様のリアリズムは‘The Woodman’では次のような表現になっている。

& be the winter cutting as it will
 Let north winds winnow fit to nip one through
 In the deep woods hard fate demands him still
 To stand the bitterest blasts that ever blew
 Where trees instead of leaves & pearly dew
 In ryhme & snow & Iscicles abound (82-87)

冬の寒さが肌を刺そうと、北風が体じゅうを凍えさせようと、森の中できこりは働く。「無情な運命」はきこりを非常に冷たい風に立ち向かわせる。彼は家族を扶養するために、否応なしに「自然」の厳しさと闘い、重労働をせざるをえない。クレアはこういう田舎の庶民の生活における現実の姿を描写する必要性を感じていた。‘The Widow or Cress Gatherer’における「日々の必需品は貧窮者に暖炉の火を起す前に／薪を集めてくるといっても極端な手段を要求する」(The daily needings wants worst shifts require / To hunt her fuel ere she makes her fires)と、‘The Woodman’における「それでも深い森の中では無情な運命がきこりに非常に冷たい風に立ち向かわせる」(In the deep woods hard fate demands him still / To stand the bitterest blasts that ever blew)という詩行は、写実的描写の欲求の端的な現われである。したがって、これらの写実的表現において、社会現実には詩人という個人の「心の眼」によって変容されてはいない。しかしながら、これら二つの詩においては、庶民を貧窮させる原因を‘hard fate’であると記述しているところがクレアのリアリズムの限界であるといえよう。こういう手法が「情景や人物を主に理想化されたヴィジョンの道具、あるいは作家と読者の間における審美的共感の道具に変える」のを好まなかったクレアのリアリズムである。

(4)

さてモグラ捕り老人の詩にもどるが、引用した12連の中ほどの102行目から13連の終わりまでのモグラの描写において、このリアリズムの特徴は希薄になり、象徴的暗示的要素が濃厚になっている。大意はこうである。あらゆる共有地で多数のモグラの死体が曲がった小枝からぶらさがっており、陽射しを浴びて、白く光っているのが見られる。モグラたちは、逃れることができない罫のことは夢にも思わず、自分たちが如何なる損害を与え

たかも知らないで死んだのであるが、彼らの悲しい運命がもたらしたその光景を目の当たりにしても誰一人悼む者はいない。耕作地で捕まり、殺されたモグラたちが柳の枝に吊り下げられている場所が人々の往来する共有地であることは、老人のモグラ捕りの技術を誇示することと、モグラに対する見せしめという二つの目的のためである。このモグラ捕り老人は、生活の資を稼ぐために農場主から依頼されて耕作地のモグラを殺すのであるから、共有地ではモグラを殺さない。共有地や荒地は、小作農 (peasantry) と彼らが転落してなった農業労働者たちが自由に入出りできる場所であった。彼らはその土地を利用する伝統的な権利をもっていた。モグラが小作農や農業労働者を象徴するならば、「回避できない畏があるとは夢にも思わず／モグラたちは自分たちが犯したすべての不正の意味も知らないで死んだ」 (dreamless of the snare they could not shun / They died unconscious of all injury done) という表現は、「囲い込み」によって共有地が開発され、耕作地用の私有地になったことで、彼らの共有地についての権利が奪われたことや、飢えをしのぐため「囲い地」でカブラを盗んだことを暗示しているとも受け取れる。モグラはたんに耕作地で作物や生垣に損害を与えるだけでなく、私有財産への侵入という罪も犯していることを暗示しているようだ。モグラたちが捕まり、殺され、柳の枝に吊り下げられるのは、農場主の所有財産を侵害したためである。このモグラのイメージは、庶民の生活権が奪われることに反対したラダイト運動の指導者たちの1811年から1817年にかけての処刑、²¹⁾ 集会中に労働者たちが虐殺された1819年のピータールー事件、1820年の内閣閣僚を暗殺しようとしたカトー街陰謀事件の首謀者シスルウッドの処刑²²⁾ を読者に連想させる。13連ではさらに暗示的な表現が続く。

On moors & commons & the pasture green
 He (the mole catcher) leaves them (moles) *undisturbed* to root & run
 Enlarging hills that have for ages been
 Basking in mossy swellings to the sun
 The pismires too their tiptops yearly climb
 To lay their eggs & hunt the shepherds crumbs
Never disturbed save when for summer thyme
 The trampling sheep upon their dwellings come (my emphasis)

荒地、共有地、牧草地では老人はモグラの行動に干渉しない。卵を産みつけるため、モグラ塚によじ登り、こぼれた羊飼いのパンくずを探すアリにとっても荒地、共有地、牧草地は私的所有地ではない。モグラとアリは「邪魔されないで」、自由に生きている。人間の不干渉によるこれら生き物の繁栄は、人間とその他の生き物の共生を暗示するエコロジカルな意味も帯びている。ここでもまた農業労働者たちのイメージがこれらの生き物のイメージと重なって見えるようである。

ワーズワスのヒル取り老人の詩に登場する人物は語り手とヒル取り老人であるが、クレアのモグラ捕り老人の詩においては、語り手・老人・老人と関係する人間たちである。クレアはモグラのイメージを象徴的なものにしてはいるが、老人を虐待する人間のイメージの描き方は曖昧である。16連における、カブラを畑から盗んで食べ、飢えをしのぐモグラ捕り老人が仕事をしながら歩きまわっているところに姿を現わす「傲慢な人間」の場合がそうである。

Prides unconcern that hath no heart to feel
 Full often in his pottering pace appears
 From whom his turnip thefts he will consceal
 Who as a tyrant wakes his humble fears
 Whose proud & threatening taunts will fill his eyes with tears

「傲慢な人間」と呼ばれる冷酷な者は老人がカブラを盗む現場をよく見つける。老人は、他人の気持ちを感じ取ることのできないこの「傲慢な人間」から、カブラを盗んだことを隠そうとする。なぜならば、具体的には獵場番人と考えられる「傲慢な人間」は「専制君主」のように思われており、老人に恐怖心を抱かせ、その尊大でかつ脅迫的な嘲りの言葉は老人の目を悲しみと悔しさの涙でいっぱいにするからである。老人もモグラと同様、「罪のない侵入者」 (innocent trespassers)²³⁾ である。所有者の土地に侵入し、食べ物を盗む点で両者は共通してい

る。この貧しい庶民である老人が、労働者階級のイメージを負荷されたモグラを殺すことはアイロニーである。語り手は、農業労働者を虐待する人間が誰であるかは明確にはわからないような、「傲慢な人間」という言い方をしているけれど、どのような階層が語り手の非難の対象であるのかは推量できる。‘The Widow or Cress Gatherer’では、この「専制君主」のような人物が貧民を虐待している救貧院の様子は次のように描き出されている。

By every means thus lingering life along
 & daily struggling gainst a stream too strong
 & thus from year to year thro foul & fine
 Shed (the widow would) sooner labour tho its but to pine
 Then* meet severer woes mid threats & frowns
 Of those brute emperors of little towns
 Whose very names awakens want to tears
 When force compells to seek its overseers
 Whose ears are shut on griefs severest sighs
 Whose hearts are marble when the hungry cries
 Railing at mouths that open to be fed
 Entailing curses in the lieu of bread
 Who een the bed of death stands tearless bye
 Were** want droops famish'd on his straw to dye
 When justice drives em as in dutys part
 To offer kindness while its grudgd at heart
 & as they turn them from the sufferers fate
 Een sneer to witness that its brought too late (125-142) *than **where

未亡人はあらゆる工夫をして、日々苦勞と闘いながら生き延びている。彼女は「小さな村の無情な独裁者たち」から脅迫され、威圧されて、ひどい悲しみを味わうよりも重労働をしたいと思う。たとえその労働が彼女の体を衰弱させるだけであるとしても、そしてやむなく貧民が民生委員たちのところに行く時、貧民はこれら独裁者たちの名前を耳にするだけでも悲しみの涙にくれる。民生委員たちは貧民の痛ましい嘆きを聞こうとせず、飢えた者が食べ物を叫び求めても、彼らの心は石のように冷たい。食べ物を求める口に向かって罵り、パンの代わりに呪いの言葉を与える。貧困者がわらのベッドの上でうなだれ、死にかけているにもかかわらず、彼らは哀れみの情を抱くことはなく、内心では嫌がっているのだが、「正義の法」の義務感に駆られて、哀れみの言葉をかける。そしてその言葉をかけるのが遅すぎたとわかると、死につつある者から顔をそむけると、軽蔑のせせら笑いを浮かべる。この一節では、村というコミュニティの民生委員などの権力者たちが非難されている。彼らは同胞への人間的な優しさをもっていない、飢えた者たちに食べ物も与えない利己主義者たちである。ワーズワスは‘The Old Cumberland Beggar’ (1798年)の中で、救貧院について次のように書いている。

May never House, misnamed of industry,
 Make him a captive; for that pent-up din,
 Those life-consuming sounds that clog the air,
 Be his the natural silence of old age. (172-5)²⁴⁾

「勤勉」と誤って名づけられた救貧院がこの乞食を收容することがないように、あの閉じ込められた騒音、空気を重くしている、あの命を消耗させる機械の騒音の代わりに老齢にふさわしい自然界の静けさがあの乞食のものであるように、このように言うワーズワスの救貧院についての受け取り方が、「自然界の静けさ」と対照的な「救貧院の騒音」という側面に限られている点に、クレアが不満を感じたであろうことは想像に難くない。機械の「命を消耗させる騒音」よりもっと注意を払うべき「悲しい」救貧院の実情を描出する必要性をクレアは感じていたと推量される。救貧院の実情は‘The Mole Catcher’の1連と2連において見事に描出されていることは既に

見たが、17 連におけるこの老人と救貧院の関係が簡潔に語られている箇所を見よう。

He(the mole catcher) once could thrash & mow & hold a plough
 Ere he was forced to seek the parish bread
 Broke down by age he feels a beggar now
 When to the overseers his wants are led

老人はかつて農作業をするのに十分な体力をもっていたが、老いてこれまでのように働くことができなくなると、救貧院が施す食べ物を求めざるをえなくなった。救貧院において、教区の民生委員たちの手を経て渡されるべく、彼らの前にこの老人の生活必需品が置かれるとき、老衰した老人は自分が「独立」を失った乞食であるように感じている。田舎の庶民が救貧院に収容されず、「乞食のように感じる」ことのない、経済的に独立した生活こそクレアが願望していたものである。「自分の生活必需品が民生委員たちの前に置かれるとき／老いて衰弱した彼は自分を乞食だと思った」という二行には救貧院と民生委員たちに対する容赦のない非難は感じとれない。だが 'The Widow or Cress Gatherer' の最後の一節では、救貧院の内実を描出し、完膚なきまで酷評している。

... misfortunes den
 Were* bloodhounds harbour neath the masks of men
 To which tho justice now & then may turn
 & blunts the weapons yet the cure detains
 She seems half sleeping while she hears em mourn
 & shuts her eyes upon their keenest pains * where

この「不幸の巣窟」、すなわち救貧院では民生委員たちの人間の顔をした仮面の下には、残忍なブラッドハウンドが潜んでいる。そうした状態に対し、「正義の法」は時として、敵の武器の矛先を避けたり、鈍くしたりするかもしれない。しかし救済策を講じようとはしない。「正義の法」は、貧民の不満の声が聞こえる時には、半ば眠っているようであるし、彼らが最もひどく苦しんでいる場面を見ようとはしない。また 'The Woodman' では、貧民への救貧院の給付金についての事情がこう述べられる。

The parish moneys but a pining fare
 Such scouts benevolence he(the woodman) does disdain
 Who grudges what they give & mocks the poor mans pain (106-8)

教区から与えられる給付金はほんのわずかしかなかく、その金額ではやせ衰えるだけの食べ物しか買えない。与えることを惜しみ、貧しい者の苦しみをあざ笑うような「あんなやつらの施す慈善」をきこりはほんとうに軽蔑する。「あんなやつら」と蔑称される人間は「村の独裁者たち」であり、教区の民生委員たちである。

救貧院の実情についてクレアが描くときのリアリズムは以上のようなものである。このリアリズムは田舎の貧民を象徴するモグラ捕り老人やクレソンを採る未亡人の生活を正確に描写するばかりではなく、語り手をして自己の思想と感情を「私」という主語を用いないで表出することにおいて成功させている。語り手は、ワーズワスの場合、ヒル取り老人の生活とその人間性について内省した結果である道徳的教訓を語っており、語り手と老人の二者の関係が個人的な問題となって提出されているのであるが、クレアの場合は、語り手・老人・羊飼いや生垣職人などの働く庶民・傲慢な人間という四者の関係が問題となっている。救貧院における利己のかつ傲慢な人間を同時に描き出すことによって、クレアが描く老人や未亡人はコミュニティにおける社会的な存在となっている。それゆえ、これらのクレアの詩は道徳的教訓についての個人的問題としてではなく、社会的政治的問題として提出されていると言えよう。

次にモグラとモグラ塚の象徴的な意味について考えてみたい。先述したように、モグラが田舎の労働者階級を象徴している可能性は、'Remembrances' (1832 年) という詩を読めば一層明瞭になるであろう。

... O I never call to mind

These pleasant names of places but I leave a sigh behind
 While I see the little mouldywharps* hang sweeing** to the wind
 On the only aged willow that in all the field remains
 & nature hides her face where theyre sweeing in their chains
 & in a silent murmuring complains
 Here was commons for their hills where they seek for *freedom* still
 Though every commons gone & though traps are set to kill
 The little homeless miners . . . (my emphasis, 35-43)²⁵⁾ * moles ** swaying

子供のころ遊んだ場所の楽しい名前を思い出すとき、詩人はいつも、畑の中でたった一本だけ残った柳の老木から小さなモグラが吊るされ、風に揺れている光景を思い浮かべ、嘆く。殺されたモグラたちが鎖に繋がれ、揺れている間、＜自然＞はこの光景を見ることに耐えられず、顔を隠し、無言のつぶやきで嘆く。ここには、モグラ塚を作るための共有地が存在していた。モグラたちはその共有地ではその時でもなお「自由」を追求することができた。だが今では、すべての共有地は消滅し、耕作地に変貌した。耕作地では、「小さなモグラ」を殺すために罠が仕掛けられている。この一節で注意すべき表現は「モグラたちがなおも自由を探し求める、塚を作るための共有地」(commons for their hills where they seek for freedom still)である。この表現においては、モグラの生態についてのイメージと、共有地を自由に利用できる諸権利を共有地の消滅によって奪われた労働者たちと、言論や集会の自由といった人間の基本的権利を求めて闘った労働者たちのイメージが重なって見える。‘Remembrances’を書いた時、一般大衆から諸権利を奪う新しく制定された多くの法律に抵抗して、1820年代の終わりから1831年にかけて「スウィングの暴動」(the Swing Riots)を起こした多くの者がすでに処刑されていたことをクレアは意識していたであろう。²⁶⁾『教区』(The Parish, 1823年)のような風刺詩を除くクレアの優れた詩においては、外界の事物のイメージに作者自身の感情・アイデアを融合させるという写実的描写における技巧によって作者の意図は直接的に表現されることはなく、容易には理解しがたいものになっている。引用文中の‘freedom’という語は‘The Mole Catcher’における85行目の「銀灰色の毛皮をもったモグラたちが穴を掘る自由を得る」(silk haired moles get liberty to root)における‘liberty’という語の重要性を読者に気づかせ、モグラがもつ象徴的意味を考えさせる。また「彼らの塚を作るための共有地」(commons for their hills)は、‘The Mole Catcher’の13連の‘undisturbed’と‘never disturbed’が含意している事柄をわれわれに考えさせる。荒地、共有地、牧草地ではモグラは人間に邪魔されなくて、自由に活動している。太古からそれまでの永い時間、苔に覆われたモグラ塚は暖かな陽射しを浴びて存在してきた。モグラはその盛り上がった土をさらに大きくしている。クレアが重要視しているものは、モグラが食べ物を蓄えておく場所である塚のイメージである。その塚の増大、すなわち繁栄は、その塚の頂上に登って卵を産むアリの自由な活動と同様、権力者たちに「干渉されないで」、幸福な生活を追求できる労働者階級の「自由」を暗示しているのかもしれない。「小さなすみかを失った鋤夫たち」(the little homeless miners)とモグラ塚のイメージはまた同時に、モグラに象徴される自然界の生き物に対する人間の破壊行為をエコロジカルな視点で洞察するクレアの意識をも反映しているであろう。‘The Flitting’ (1832年)という詩では、「以前は野原のモグラ塚が存在し、／楽しい日々について私に語ってくれたものだ」(... pasture molehills used to lie / And talk to me of sunny days, 121-2),²⁷⁾ ‘The Shepherd Fire’ (1830年)では「焚き火のまわりでモグラ塚の上に／ほんとうに楽しく車座になっている男の子たち」(boys that sit right merry in a ring / Round fires upon a molehill..., 4-5),²⁸⁾ ‘Hare at Play’ (1819-32年)では「それぞれの古いモグラ塚の上で羊たちがあえぎながら横たわっている」(sheep lie panting on each old mole hill, 2),²⁹⁾ また‘On Visiting A Favourite Place’ (1832年)では「モグラ塚は、それがまるで休息のためにわざと作られているかのように／私に歓迎のことばをかける」(The molehills their welcomes lend / As if for rest on purpose made, 37-8)³⁰⁾ という詩句が見られる。これらのモグラ塚のイメージは幸福・楽しさ・安楽・休息と結びついている。

ここでモグラとモグラ塚について書かれた‘The Mole’ (1819-32年)というソネットを読んでおくことは重要である。

Rude architect rich instincts natural taste
 Is thine by heritage—thy little mounds
 Bedecking furze clad heath & rushy waste
 Betraced with sheeptracks shine like pleasure grounds

No rude inellegance thy work confounds
 But scenes of picturesque & beautiful
 Lye mid thy little hills of cushioned thyme
 On which the cow boy when his hands are full
 Of wild flowers leans upon his arm at rest
 As though his seat were feathers—when I climb
 Thy little fragrant mounds I feel thy guest
 & hail neglect thy patron who contrives
 Waste spots for the[e] on natures quiet breast
 & taste loves best where thy still labour thrives³¹⁾

モグラは教養のない建築家と呼ばけられる。モグラは教育を受けてはいないが、素晴らしい生得の、本能的な識別力といわれるものをもっている。羊たちの通った跡が残っているハリエニシダに覆われたヒースや葦が生えた荒地に装飾品のように点在するモグラ塚は、遊び場のような楽しい場所として、日差しを浴びて輝いている。この場所は人間のどんな俗悪さ、没趣味によっても壊されることはなく、「絵のように美しい」風景が柔らかなタチジャコウソウに飾られた「小さな塚」の間に見えるという。その塚の上に、野の花を両手いっぱい摘んだ牛飼いの少年が横になって休息をとっている。芳香を放っている「小さな塚」に登った詩人は、人間から無視されている状態をその塚の庇護者であると呼びかける。荒れた場所は、無視されることによって、モグラが活動できるように工夫されている。'neglect' という語は、勤勉な人間がヒースや荒地を「囲い込み」によって耕作地に開発しないことを意味している。モグラの「静かな労働」(still labour) が盛んに行われる場所を、識別力や想像力をもった人間は最も好む。モグラは、とくにその活動の特徴を表す 'rude architect', 'still labour', 'thy work' という語句で労働者階級を暗示しているようだ。詩人は、低いもの、馴染み深いものとしてのモグラ塚を詩的靈感の源泉であるパルナツソス山に見立てており、崇高化している。³²⁾ またモグラ塚のイメージにおいては、「勤勉」(industry) や「利己主義」(self interest) と対蹠点にある「休息」(rest), 「楽しみ」(pleasure), 「なおざり・無視」(neglect) が強調されている。Sara の解釈によれば、モグラは「封じ込め」(containment) とは無縁な土の中で屈従せずに動きまわるといった概念と結びつけられている。Sara はクレアの想像力におけるモグラと庶民の共通性を指摘し、次のように洞察に満ちた考察をしている。

The smallness and invisibility of moles links them in Clare's imagination to the common man. They are creative architects with 'rich instincts natural taste' but also labourers. Indeed their 'still labour' paradoxically unites the peacefulness of rest with the virtues of industry. Most vitally, they are integrally connected to an idea of holding, building, and moving within land that is alien to containment. They live not on the land but in it—it is their element, their home. They are pursued for harming fences, failing to recognize property boundaries. Politically speaking they therefore symbolise resistance to enclosure.³³⁾

最後に、このモグラ捕り老人とモグラの共通点を確認してこの稿を閉じたい。それは、老人もモグラも「囲い込み」が生み出した私有地への侵入者ということである。両者とも生き残っていくために私有地に侵入し、食べ物を盗まなくてはならない。彼らを虐待する共有の敵対者を、語り手は「傲慢な者」という語を用いて曖昧に表現している。しかしこの語が教区の民生委員などの権力者たちを意味することは確かである。また両者は「隠遁者」(hermit) として言及されている。渡り労働者としての老人は「わびしい野原を放浪する隠遁者」(hermit pilgrim on some lonely plain, 45) であり、モグラは「小さな隠遁者」(the little hermit, 96) と呼ばれている。「隠遁者」という語は、この老人の場合、荒涼たる自然の中で働く労働者階級に属する庶民の目立たない、卑小な一人の人間であり、社会の表舞台からは隠れて見えない存在であるという意味を表わすのではないだろうか。この語は、モグラの場合、土の中に生きて、人間の支配構造の外側に住み、地上からは隠れて見えない存在であるという意味を表わすであろう。この「隠遁者」という語は、隠れて見えない状態によって老人とモグラを共通の圧迫者による虐待から回避させ、その圧迫者に対する同盟者として結びつけるものである。こう考えると、この語は、ワーズワスの隠遁者であり、「道徳的模範」であるヒル取り老人に対するクレアの反応を表わしている言葉であると言えよう。

‘The Mole Catcher’を以上のように読んでくると、この詩は、救貧院の実情及びモグラ捕り老人の労働の写実的描写におけるリアリズム、この老人の精神生活及び村人との交流の描写におけるリアリズムと理想主義の並存、労働者を象徴するモグラについての、象徴的かつ暗示的表現を目指したリアリズムと理想主義の融合といった手法から成り立っていると考えられる。そしてこの詩の最大の含意は、この老人とモグラによって象徴される下層労働者階級の、権力者たちへのレジスタンスではないだろうか。この詩がクレアの代表作『羊飼いの暦』(*The Shepherd's Calendar*, 1827年)に編入されなかった理由が、救貧院や虐待する者たちについての微妙な表現にあったことは容易に想像できる。この詩は、「この詩の内容における緊張」(*tensions in the poem's content*)³⁴⁾を知っていたクレアが自己検閲し、そうした表現を何度も書き改めて出来上がったものである。

注

- 1) Mark Storey ed., *The Letters of John Clare* (Oxford U. P., 1985), p. 231.
- 2) Margaret Grainger ed., *The Natural History Prose Writings of John Clare* (Oxford U. P., 1983), p.197.
- 3) Grainger, p. 199.
- 4) Sara Lodge, ‘A Life Outside: Clare’s Mole Catcher’, *The John Clare Society Journal* (Number 20, 2001), p.14.
- 5) Sara, p.16.
- 6) See Sara, p. 5.
- 7) Sara, p. 6.
- 8) ‘The Mole Catcher’のテキストはEric Robinson, David Powell and P. M. S. Dawson eds., *John Clare: Poems of the Middle Period 1822-1827* (以下MPと略す), Volume II (Oxford U. P., 1996, pp. 21-29)を使用した。
- 9) E. Robinson, D. Powell and M. Grainger eds., *The Early Poems of John Clare 1804-1822* (以下EPと略す), Volume II (Oxford U. P., 1989), p. 652.
- 10) Stephen Gill ed., *The Oxford Authors: William Wordsworth* (Oxford U. P., 1984), p. 263.
- 11) Anne Elizabeth Baker, *Glossary of Northamptonshire Words and Phrases Volume Two* (Norfolk: Lark Publications, 1995)
- 12) Sara, p. 15.
- 13) Sara, p. 15.
- 14) MP, III, p. 418.
- 15) EP, II, p. 288.
- 16) See Sara, pp. 14-15.
- 17) Tillottama Rajan, *The Supplement of Reading: Figures of Understanding in Romantic Theory and Practice* (Cornell U. P., 1990, p. 144) quoted in Sara, p. 15.
- 18) Sara, p. 15.
- 19) Grainger, p. 120.
- 20) EP, II, pp. 658-9.
- 21) マックス・ベア, 『イギリス社会主義史』(大島清訳, 岩波文庫, 1996年) p. 238 及び G. M. トレヴェリアン, 『イギリス社会史2』(松浦・今井訳, みすず書房, 1996年) p. 396 参照。
- 22) トレヴェリアン, 『イギリス史3』(大野真弓監訳, みすず書房, 2000年) p. 119 参照。
- 23) Sara, p. 11.
- 24) *The Oxford Authors: William Wordsworth*, p. 54.
- 25) MP, IV, p. 132.
- 26) See John Lucas, ‘Clare’s Politics’, *John Clare in Context* ed. Hugh Haughton, Adam Phillips and Geoffrey Summerfield (Cambridge U. P., 1994), p. 166.
- 27) MP, III, p. 485.
- 28) MP, IV, p. 194.
- 29) MP, IV, p. 233.
- 30) MP, III, p. 562.
- 31) MP, IV, pp. 294-5.
- 32) See Timothy Brownlow, *John Clare and Picturesque Landscape* (Oxford U. P., 1983), p. 37.
- 33) Sara, p. 12.
- 34) Sara, p. 15.